

## 教養における一般と典型

鯨坂 恒夫

教養とは何かというテーマは、延々と語りつがれているものであるが、筆者としては歴史と思想が根幹にある、とつい思ってしまい、地域という視点とは違うと断じてしまいそうになる。しかし、教養とは culture であり、その動詞 cultivate すなわち耕すことに端を発しているといわれると、世界観の変更を迫られることになる。つまり、大局的・抽象的・トップダウンの思考は往々にして空回りするのであって、局所的・具体的・ボトムアップの行動を積み重ねなければ実のあるものにならない、という示唆である。

この両者は、例えば企業組織における本部と現場のせめぎあいにも似ている。現場の実情・詳細を知らない本部が勝手な判断・計画を推し進めてもうまくいくわけがない、という定番のクレームである。このことはしかし、日本では比較的最近（30年ぐらい前から）の現象かもしれない。それ以前の日本企業、とくに製造業では、全社員が一丸となって自社の製品品質を保つQC（quality control）サークルという活動があって、欧米やアジア、全世界がおよそまねのできない、「一家のような企業」の現場能力が発揮されていた。トップとボトムが渾然一体となれる稀有な、世界から見れば不思議な体制で、Japan as No.1 を勝ち取った。

5•

日本人はどうも局所・具体が得意（大局・抽象は苦手）なのではないか。柳田邦夫や宮沢賢治、南方熊楠など、まさに「地域教養」の旗手のような才人があまたいるのに対し、西田幾多郎を例外として、原理や抽象論で世界に伍する巨人は少ないような気がする。自然科学でも、ノーベル賞受賞者はそれなりにいるが、基本的な発見や発明を受けて、その効果を先鋭化する技術のほうに日本の貢献の度合いが大きい。ただし、このことについて、原理が偉くて実装は格下と卑下することはない。トップダウンとボトムアップは、両者がバランスよく組み合わせられていなければ、よい結果をもたらさない。

とりあえず事を始めるにあたっては、ボトムアップで攻めるのがよい。一直線に成果に直結する神の啓示はおいそれとやってくるものではないので、思いつくままに手近なところから、いろいろとやってみる。そこから何かが帰納できそうになるまで、あれやこれや事例を増やす。しかし往々にして、手をかえ品をか

えて試しているつもりでも、ある一本の木の周辺を巡っていることが多い。つまり、ボトムアップアプローチの欠点は、森全体を見通せず、よりよい果実を見落として、局所最適解に陥ってしまうことである。

そこでトップダウンアプローチを繰り出す。とはいえ、これはボトムアップのように気安くない。明瞭な大きな目的を段階的にブレイクダウンすればよいとはいうが、そうして得た枝葉をある方向に偏って生やしてしまえば、やはり局所最適解に突き進んでしまう。そうならないための一つの方法は、個々のボトムアップ事例で当然としていた前提を否定してみることである。ただし、これはなかなか勇気のいることだし、成功するかどうかは瓢箪から駒レベルのレアさ加減かもしれず（トヨタのかんばん方式just-in-time approachはその稀な成功事例か）、日常的な指導原理にはならないかもしれない。例えば、メンバーシップ型雇用（新卒一括採用、終身・年功序列）の放棄（ジョブ型雇用への移行）という最近の傾向は、一世代（30年）以上のスパンで日本型企业運営の前提を否定しにかかっているが、果たしてそれだけで確実に改善（英語になったkaizen）を獲得し、全体最適に向かうのかどうか。

#### ◆6

ひょっとすると、トップダウンを上手に織り交ぜることが肝要である、と教科書的に信じていたメタレベルの「前提」を否定しなければならないのだろうか。そういえば、「大きな物語の終焉」（リオタール：『ポストモダンの条件』、1979）という話があった。まさに歴史・思想から民俗（地域）への重心移動の開始を示していたのではないか。それから30年以上経ったいま、人工知能（AI）の蔓延が、実はこれに呼応している。AIは大きな物語、つまり「一般」ということを全く理解しない。個々、個別の「典型」を都度投げかけるのみである。そんなAIを続々と導入して、人間は思考停止してしまってよいのか（よいわけがない）。そこで一般と典型を対比して考える属性表をつくってみた。（この表自体は筆者のオリジナルであるが、考察にあたって参考にした文献がある：合意形成研究会編『カオス時代の合意学』、創文社、1994、I-3-2（田中茂範）「意味空間の構造化と共有」）

一般も典型も、相手にしているのは多数の事物である。しかし、相手のしかたが多く側の側面で互いに正反対になっている。とくに、一般化は概念集合（クラス）の構造的・普遍的分類を基礎としており、そのためには言語的理解を方法とすることが必須である。かたや典型とは、アドホックな事例（インスタンス）の非構造的な出現で、言語による意味づけを必ずしも必要としない。だからこそ、

	一般化	典型化
対象	多数の事物	多数の事物
結果	ひとつの概念集合で説明する	頻出する特別な事物が代表する
記憶	経験・記憶に直結しない	多くの人が経験し記憶する
要素	変数	定数
指向	分割指向	連係指向
構造	構造的	非構造的
作用	共通化・全体化・体系化	差異化・偶発的部分への接近
言語	言語記述が絶対的基礎	言語依存性は強くない
性質	客観的	主観的
事例	学術・技術、システム概念	日常生活、業務、パターン

A I がなにがしかの結果を出してくる。A I が扱っているのは「値」でしかない。言語を解さないA I にとっての「意味」は、大量の値の分布状況である。人間にはそれはできない。人間にとっては、値そのものに意味が内包されることはなく、属性名と属性値の組（例えば「住所」と「和歌山市」）によって要素の意味を把握し、それら要素の組合せを言語化することによって状況説明に至る。

人間も、普通の人間は、常々一般性を意識しているわけではなく、日常的には典型に従って生きている。ただし、人間は典型に対しても、ほとんど無意識的にもかもしれないが、言語的理解をしている。だからこそ、典型をいくつも観察すれば、言語的に明確な因果関係で説明される一般化に到達することが（たまた）できる。典型（具体的事象）が一般（抽象的規則）に推移する条件は、説明する概念集合がコンパクト化（情報の次元を削減）できるかどうかである。オッカムの剃刀が効くかどうかである。（A I はそんなことをしない。データ次元が莫大であっても、ブルドーザーパワーでごっそりやってしまう。）

7♦

一般原理というものは、そんなにたくさんあるものではない。どこまでが原理でどこからが詳細かということは、戦略と戦術と技術の境目が、包丁で切ったように際立っているわけではないように、少々思い切って詳細とおぼしきものは捨て、できるだけ大域的なところだけをおさえることにすれば、一般原理の体系は把握しきれると思われる。一方、「小さな物語」のほうは、それこそ次から次へと、しかもときどき「意外性」をもって現れる。パターンに対するバリエーションである。これは汲めども尽きず出現し続け、到底、全貌をつかめるものではない。

ではこれをどう楽しめばよいかというと、比較することである。およそ比較ということは、比較神話学などことさら形容句として用いるまでもなく、学術・

技術を展開するための王道である。何が共通で、どこに違いがあるかを追求する。地域を教養とするにあたっては、ある特定の地域のある特定の現象だけを注視するのではなく、他の地域との比較、他の現象との関連、あるいは一般論との関係を議論しなければならない。何が共通でどこに違いがあるかを見ることは、結局、分類（taxonomy）を確立しようとする所作であり、AIにはできない、人間にしかできない、数少ない「普遍」のひとつを追加することにつながる。

残念ながら、しかし、普遍とか一般とかは、実はもうかなり出尽くしているのかもしれない。アリストテレスとユダヤ預言者、それにゴータマ・シッダールタと孔子が同時多発的に登場したあたりで、人文学的にはあらかた整ったという、ややほげしい見方もある（ヤスパースが枢軸時代と言ったらしい）。自然科学はだいぶ遅れるが、それでも20世紀前半に相対論と量子力学、DNA二重らせんが明らかになったところで終わっているのだろうか。いや、リオタールにはわるいが、大きな物語第二幕がないとは限らない。AIが典型を「自動生成」するようになった時代、それを大量消費・大量廃棄してしまうのではなく、これを材料になにか、いわば、位相の異なる普遍を見出せるのではないか、という妄想を捨てきれない。